

萬葉集抄

特231

247



始



特231
247



萬葉集抄

青森縣立青森中學校刊



はしがき

自分の経験からして思ふことは、最初に與へるには、天下第一の書
が最も適當ではないかといふ事である。年経て讀む度毎に深まつて行
く、そして、生涯誦讀するに足る書、これが第一に與へられてよい。
今の少年ははじめから少年の書を読むから、三、四十年を隔て、それ
にめぐり會ふやうな機會もない。新聞のやうに、その時その時に讀み
捨てゝ行つてゐる。さう思ふと、少年の讀物なく、成人の書のみが世
界に生れて、はじめから成人の書を読んで來た自分を顧みて、これも
亦仕合せであつたと思ふ。十七八迄に日本の古典をほんといふ一人
の力でよみ、それから後現代を學んだ私の身を仕合せであると思ふ。

— 金 原 省 吾

我が國未曾有の國難に際會して傳統の護持を懷ふこと愈々切なるもの
がある。傳統への通路は一に正しく美しい我が古典の誦讀にある。こゝ
に古典を抄して讀本を編み研修の資となす所以である。

昭和十八年四月

編 者 識

萬葉集抄

籠もよみ籠持ち 掘串もよみ掘串持ち この岳に 菜
摘ます兒 家聞かな 名告らさね そらみつ やまとの國
は おしなべて 吾こそ居れ 敷きなべて 吾こそ坐せ
我こそは告らめ 家をも名をも (卷一) 雄略天皇

籠毛與 美籠母乳 布久思毛與 美夫君志持 此岳爾 菜採須兒 家吉閑 名告
沙根 虛見津 山跡乃國者 押奈戶手 吾許曾居 師吉名倍手 吾己曾座 我許
背齒告白 家乎毛名雄母

香具山に登りて望國しませる時、御製の歌
大和には 群山あれど とりよろふ 天の香具山 登り立

ち 國見をすれば 國原は 煙立ち立つ 海原は 鷗立ち
立つ うまし國ぞ あきつ鳥 大和の國は (卷二) 舒明天皇

山常庭 村山有等 取與呂布 天乃香具山 騰立 國見乎爲者 國原波 煙立龍
海原波 加萬目立多都 怜何國會 蜻島 八間跡能國者

舒明天皇、内野に遊獵し給へる時間人連老をして獻らせ
たまふ歌

やすみしし わが大王の 朝には とり撫でたまひ 夕に
はい倚り立たしし 御執らしの 梓弓の 長弭の 音す
なり 朝獵に 今立たすらし 暮獵に 今立たすらし 御
執らしの 梓弓の 長弭の 音すなり (卷一) 中 皇 命
八隅知之 我大王乃 朝庭 取撫賜 夕庭 伊緣立之 御執乃 梓弓之 奈加弭

乃 音爲奈利 朝獵爾 今立須良思 暮獵爾 今他田渚良之 御執能 梓能弓之
奈加弭乃 音爲奈里

反歌

たまきはる宇智の大野に馬竝めて朝踏ますらむその草深野

玉刻春 内乃大野爾 馬數而 朝布麻須等六 其草深野

磯田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今は榜ぎ出で

な (卷一)

額田王

巽田津爾 船乗世武登 月待者 潮毛可奈比沼 今者許藝乞奈

渡津海の豊旗雲に入日さし今夜の月夜清く明りこそ (卷一)

天智天皇

渡津海乃 豊旗雲爾 伊理比沙之 今夜乃月夜 清明己會

天智天皇、内大臣藤原朝臣に詔して、春山の萬花の艶、
秋山の千葉の彩を競はしめ給ふ時、歌を以ちてことわれ
る歌

冬ごもり 春さり來れば 鳴かざりし 鳥も來鳴きぬ 開
かざりし 花も開けれど 山を茂み 入りても取らず 草
深み 取りても見ず 秋山の 木葉を見ては 黄葉をば
取りてぞ賞ふ 青きをば 置きてぞ歎く そこし恨めし

秋山吾は (卷一)

額田王

冬木成 春去來者 不喧有之 鳥毛來鳴奴 不開有之 花毛佐家禮杆 山乎茂
入而毛不取 草深 執手母不見 秋山乃 木葉乎見而者 黄葉乎婆 取而會思
奴布 青乎者 置而會歎久 會許之恨之 秋山吾者

近江國に下りし時よめる歌

味酒 三輪の山 あをによし 奈良の山の 山の際にい
隠るまで 道の隈 い積るまでに つばらにも 見つつ行
かむを しばしばも 見放けむ山を 情なく 雲の 隠さ
ふべしや (卷一)

額田王

味酒 三輪乃山 青丹吉 奈良能山乃 山際 伊隱萬代 道隈 伊積流萬代爾
委曲毛 見管行武雄 數數毛 見放武八萬雄 情無 雲乃 隱障倍之也

反歌

三輪山をしかも隠すか雲だにも情あらなむ隠さふべしや

三輪山乎 然毛隱賀 雲谷裳 情有南畝 可苦佐布倍思哉

み吉野の 耳我がの嶺に 時なくぞ 雪は降りける 間なく

五

ぞ 雨は零りける その雪の 時なきが如ごと その雨の間ま
なきが如ごと 隈もおちず 思ひつつぞ來る その山道を

(卷一)

天武天皇

三吉野之 耳我嶺爾 時無會 雪者降家留 間無會 雨者零計類 其雪乃 時
無如 其雨乃 間無如 隈毛不落 思乍叙來 其山道乎

春過ぎて夏來るらし白妙の衣ほしたり天の香具山 (卷二)

持統天皇

春過而 夏來良之 白妙能 衣乾有 天之香具山

近江の荒都を過る時よめる歌

玉禪たまなき 畝火うねびの山の 檀原かしばらの 日知ひじりの御代ゆ 生れましし

神のことごと 樛つがの木の いやつぎつぎに 天の下 知ろ
しめししを 天そらにみつ 倭を置きて あをによし 奈良山
を越え いかさまに おもほしめせか 天離あまざかる 夷ひなにはあ
れど 石走いはせる 淡海あふみの國の ささなみの 大津の宮に 天あめ
の下 知ろしめしけむ 天皇すめらみの 神みことの尊の 大宮は 此處こゝ
と聞けども 大殿は 此處こゝと言へども 春草の 茂く生ひ
たる 霞立つ 春日の霧れる 百磯城ももしきの 大宮處おほみやどころ 見れば
悲しも (卷二)

柿本人麿

玉手次 畝火之山乃 樛原乃 日知之御世從 阿禮座師 神之盡 樛木乃 彌繼
爾爾 天下 所知食之乎 天爾滿 倭乎置而 青丹吉 平山乎越 何方 御念食
可 天離 夷者雖有 石走 淡海國乃 樂浪乃 大津宮爾 天下 所知食兼 天
皇之 神之御言能 大宮者 此間等雖聞 大殿者 此間等雖云 春草之 茂生有

霞立 春日之霧流 百磯城之 大宮處 見者悲毛

反歌二首

ささなみの志賀の辛碇幸くあれど大宮人の船待ちかねつ

樂浪之 思賀乃辛碇 雖幸有 大宮人之 船麻知兼津

ささなみの志賀の大曲淀むとも昔の人に亦も逢はめやも

左散難彌乃 志我能大和太 興村六友 昔人二 亦母相目八毛

吉野宮に幸せる時よめる歌

やすみしし 吾大王 神ながら 神さびせすと 芳野川

たぎつ河内に 高殿を 高しりまして 登り立ち 國見を

すれば 疊はる 青垣山 山祇の 奉る御調と 春べは

花かざし持ち 秋立てば 黄葉かざせり 逝き副ふ 川の

神も 大御食に 仕へ奉ると 上つ瀬に 鵜川を立て 下

つ瀬に 小網さし渡す 山川も 依りて奉れる 神の御代

かも (卷一)

柿本人麿

安見知之 吾大王 神長柄 神佐備世須登 芳野川 多藝津河内爾 高殿乎 高

知座而 上立 國見乎爲波 疊有 青垣山 山神乃 奉御調等 春部者 花挿頭

持 秋立者 黄葉頭刺理 逝副 川之神母 大御食爾 仕奉等 上瀬爾 鵜川乎

立 下瀬爾 小網刺波 山川母 依氏奉流 神乃御代鴨

反歌

山川もよりて奉れる神ながらたぎつ河内に船出するかも

山川毛 因而奉流 神長柄 多藝津河内爾 船出爲加母

輕皇子の安騎野に宿りませる時よめる歌

やすみしし 吾大王 高照す 日の皇子 神ながら 神さ

九

びせすと 太敷かす 京を置きて 隠口の 泊瀬の山は 眞
 木立つ 荒山道を 石が根の 楮枝おしなべ 坂鳥の 朝
 越えまして 玉かぎる 夕さりくれば み雪降る 阿騎の
 大野に 旗薄 しのをおし靡べ 草枕 旅宿りせず 古思
 ひて (卷一)

柿本人麿

八隅知之 吾大王 高照 日之皇子 神長柄 神佐備世須登 太敷爲 京乎置而
 隠口乃 泊瀬山者 眞木立 荒山道乎 石根 楮枝押靡 坂鳥乃 朝越座而 玉
 限 夕去來者 三雪落 阿騎乃大野爾 旗須爲寸 四能乎押靡 草枕 多日夜取
 世須 古昔念而

短歌四首

阿騎の野に宿る旅人うち靡き寐も寝らめやも古おもふに
 阿騎乃野爾 宿旅人 打靡 寝毛宿良目八方 古部念爾

眞草刈る荒野にはあれど黄葉の過ぎにし君が形見とぞ來し

眞草刈 荒野者雖有 葉 過去君之 形見跡會來師

東の野にかぎろひの立つ見えてかへりみすれば月西渡きぬ

東 野炎 立所見而 反見爲者 月西渡

日並の皇子の尊の馬竝めて御獵立たしし時は來向ふ

日雙斯 皇子命乃 馬副而 御獵立師斯 時者來向

藤原宮の役民のよめる歌

やすみしし 吾大王 高照す 日の皇子 あらたへの 藤
 原が上に 食國を 見し給はむと 都宮は 高知らさむと

神ながら 思ほすなべに 天地も 依りてあれこそ 磐走
 る 淡海の國の 衣手の 田上山の 眞木さく 檜の 婦手
 を もののふの 八十氏川に 玉藻なす 浮べ流せれ 其
 を取ると さわぐ御民も 家忘れ 身もたな知らに 鴨じ
 もの 水に浮きゐて 吾が作る 日の御門に 知らぬ國
 依り巨勢道ゆ 我が國は 常世にならむ 圖負へる 神亀
 も 新代と いづみの河に 持ち越せる 眞木の 婦手を
 百足らず 筏に作り 浜すらむ 勤はく見れば 神ながら
 ならし(卷二)

八隅知之 吾大王 高照 日之皇子 荒妙乃 藤原我宇倍爾 食國乎 賣之賜牟
 登 都宮者 高所知武等 神長柄 所念奈戸二 天地毛 緣而有許會 磐走 淡
 海乃國之 衣手能 田上山之 眞木佐苦 檜乃婦手乎 物乃布能 八十氏河爾

玉藻成 浮倍流禮 其乎取登 散和久御民毛 家忘 身毛多奈不知 鴨自物 水
 爾浮居而 吾作 日之御門爾 不知國 依巨勢道從 我國者 常世爾成牟 圖負
 留 神龜毛 新代登 泉乃河爾 持越流 眞木乃都麻手乎 百不足 五十日太爾
 作 浜須良牟 伊蘇波久見者 神隨爾有之

藤原宮の御井の歌

やすみしし わが大王 高照す 日の皇子 あらたへの
 藤井が原に 大御門 始め給ひて 埴安の 堤の上に 在
 り立たし 見し給へば 大和の 青香具山は 日の經の
 大御門に 春山と 繁みさび立てり 畝火の この瑞山は
 日の緯の 大御門に 瑞山と 山さびいます 耳無の 青
 すが山は 背面の 大御門に 宜しなべ 神さび立てり

名ぐはし 吉野の山は 影面の 大御門ゆ 雲居にぞ 遠
くありける 高知るや 天の御蔭 天知るや 日の御影の
水こそは 常にあらめ 御井の清水 (卷一) 作者不詳

八隅知之 和期大王 高照 日之皇子 龜妙乃 藤井我原爾 大御門 始賜而
埴安乃 埴上爾 在立之 見之賜者 日本乃 青香具山者 日經乃 大御門爾
春山跡 之美佐備立有 畝火乃 此美豆山者 日緯能 大御門爾 彌豆山跡 山
佐備伊座 耳無之 青菅山者 背友乃 大御門爾 宜名倍 神佐備立有 名細
吉野乃山者 影友乃 大御門從 雲居爾會 遠久有家留 高知也 天之御蔭 天
知也 日御影乃 水許會波 常爾有米 御井之清水

短歌

藤原の大宮づかへあれつぐや處女がともは羨しきろかも

藤原之 大宮都加倍 安禮衝哉 處女之友者 乏吉呂賀聞

持統天皇紀伊國に幸せる時の歌

巨勢山のつらつら椿つらつらに見つつ思ふな巨勢の春野を

(卷一)

坂門人足

巨勢山乃 列列椿 都良都良爾 見乍思奈 許湍乃春野乎

持統天皇紀伊國に幸せる時の歌

麻裳よし紀人羨しも亦打山行き來と見らむ紀人羨しも

(卷一)

調 淡海

朝毛吉 木人乏母 亦打山 行來跡見良武 樹人友師母

持統天皇參河國に幸せる時の歌

引馬野にほふ榛原入り亂り衣にほはせ旅のしるしに

(卷一)

引馬野爾 仁保布榛原 入亂 衣爾保波勢 多鼻能知師爾

一六

長 奧 磨

持統天皇參河國に幸せる時の歌

何所にか船泊すらむ安禮の埼こぎ回み行きし棚無し小舟

(卷一)

高市 黒人

何所爾可 船泊爲良武 安禮乃崎 榜多味行之 棚無小舟

駕に従ひてよめる歌

丈夫が得物矢手挿み立ち向ひ射る形的形は見るに清けし

(卷一)

舍人 娘子

丈夫之 得物矢手挿 立向 射流圓方波 見爾清潔之

五八

六一

六二

三野連入唐の時よめる歌

在嶺よし對馬の渡海なかに幣取り向けて早還り來ね (卷一)

春日 老

在根良 對馬乃渡 渡中爾 幣取向而 早還許年

大唐に在りし時、本郷を憶ひてよめる歌

いざ子どもはやく日本へ大伴の御津の濱松待ち戀ひぬらむ

(卷一)

山上 憶良

去來子等 早日本邊 大伴乃 御津乃濱松 待戀奴良武

難波宮に幸せる時よみませる歌

葦邊ゆく鴨の羽交に霜零りて寒き夕は大和し思ほゆ (卷一)

一七

六三

六四

葦邊行 鴨之羽我比爾 霜零而 寒暮夕 倭之所念

志貴皇子

持統天皇、吉野宮に幸せる時よめる歌

大和には鳴きてか來らむ呼子鳥象の中山呼びぞ越ゆなる

(卷一)

高市黑人

倭爾者 鳴而歟來良武 呼兒鳥 象乃中山 呼曾越奈流

丈夫の輓の音すなりもののふの大臣楯立つらしも (卷一)

元明天皇

丈夫之 輓乃音爲奈利 物部乃 大臣 楯立良思母

うらさぶる情さまねしひさかたの天の時雨の流らふ見れば

(卷一)

長田王

浦佐夫流 情佐麻禰之 久堅乃 天之四具禮能 流相見者

天智天皇、聖躬不豫の時奉れる御歌

天の原ふりさけ見れば大王の御壽は長く天足らしたり

(卷二)

倭姫皇后

天原 振放見者 大王乃 御壽者長久 天足有

天智天皇聖體不豫、御病急なりし時奉れる御歌

青旗の木旗の上を通ふとは目には見ゆれど直に逢はぬかも

(卷二)

倭姫皇后

青旗乃 木旗能上乎 賀欲布跡羽 目爾者雖視 直爾不相香裳

鯨魚取り 淡海の海を 沖放けて 榜ぎ來る船 邊附きて
榜ぎ來る船 沖つ權 甚くな撥ねそ 邊つ權 甚くな撥
ねそ 若草の 夫の 念ふ鳥立つ (卷二) 後 姫 皇后

鯨魚取 淡海乃海乎 奥放而 榜來船 邊附而 榜來船 奥津加伊 痛勿波禰會
邊津加伊 痛莫波禰會 若草乃 孀之 念鳥立

日並皇子尊の殯宮の時よめる歌
天地の 初の時 ひさかたの 天の河原に 八百萬 千萬
神の 神集ひ 集ひ坐して 神分ち 分ちし時に 天照す
日靈尊 天をば 知ろしめすと 葦原の 瑞穂の國を 天
地の 依り合ひの極 知ろしめす 神の命と 天雲の 八

重かき別きて 神下し 坐せまつりし 高照す 日の皇子
は 飛鳥の 淨の宮に 神ながら 太敷きまして 天皇の
敷きます國と 天の原 岩戸を開き 神上り 上り坐しぬ
わが大王 皇子の命の 天の下 知ろしめしせば 春花の
貴からむと 望月の 滿はしけむと 天の下 四方の人の
大船の 思ひ憑みて 天つ水 仰ぎて待つに いかさまに
思ほしめせか 由縁もなき 眞弓の岡に 宮柱 太敷きま
し 御殿を 高知りまして 朝ごとに 御言問はさず 日
月の 數多くなりぬれ そこ故に 皇子の宮人 行方知ら
ずも (卷二) 柿 本人 磨

天地之 初時 久堅之 天河原爾 八百萬 千萬神之 神集 集座而 神分 分

之時爾 天照 日女之命 天乎波 所知食登 葦原乃 水穗之國乎 天地之 依
相之極 所知行 神之命等 天雲之 八重搔別而 神下 座奉之 高照 日之皇
子波 飛鳥之 淨之宮爾 神隨 太布座而 天皇之 敷座國等 天原 石門乎開
神上 上座奴 吾王 皇子之命乃 天下 所知食世者 春花之 貴在等 望月乃
滿波之計武跡 天下 四方之人乃 大船之 思憑而 天水 仰而待爾 何方爾
御念食可 由緣母無 眞弓乃崗爾 宮柱 太布座 御在香乎 高知座而 明言爾
御言不御問 日月之 數多成塗 其故 皇子之宮人 行方不知毛

反歌二首

ひさかたの天見るごとく仰ぎ見し皇子の御門の荒れまく惜
しも

久堅乃 天見如久 仰見之 皇子乃御門之 荒卷惜毛

あかねさす日は照らせれどぬばたまの夜渡る月の隠らく惜

鳥の宮勾の池の放ち鳥人目に戀ひて池に潜かず (卷二)

柿本人麿

鳥宮 勾乃池之 放鳥 人目爾戀而 池爾不潜

しも

茜刺 日者雖照有 烏玉之 夜渡月之 隠良久惜毛

慟傷してよめる歌

東の瀧の御門に侍へど昨日も今日も召すこともなし (卷二)

日並皇子宮の舍人

東乃 多藝能御門爾 雖伺侍 昨日毛今日毛 召言毛無

慟傷してよめる歌

あさ日照る島の御門におぼほしく人音もせねばまうらがな
しも (卷二)

且日照 島乃御門爾 鬱悒 人音毛不爲者 眞浦悲毛

日並皇子宮の舍人

持統天皇、雷岳に遊びましし時よめる歌

皇は神にしませば天雲の雷の上に盧せるかも (卷三)

柿本人麿

皇者 神二四座者 天雲之 雷之上爾 盧爲流鴨

志斐嫗に賜へる御製の歌

不聴といへど強ふる志斐のが強語このごろ聞かずて朕戀ひ
にけり (卷三)

持統天皇

不聽跡雖云 強流志斐能我 強語 比者不聞而 朕戀爾家里

和へ奉れる歌

いなといへど語れ語れと詔らせこそ志斐いは奏せ強語と言
る (卷三)

志斐嫗

不聽雖謂 話禮話禮常 詔許曾 志斐伊波奏 強話登言

詔に應ずる歌

大宮の内まで聞ゆ網引すと網子ととのふる海人の呼び聲

(卷三) 長意吉麿

大宮之 内二手所聞 網引爲跡 網子調流 海人之呼聲

驕旅の歌

二五〇

玉藻刈る敏馬を過ぎて夏草の野島の埼に船近づきぬ (卷三)

柿本人麿

珠藻刈 敏馬乎過 夏草之 野島之崎爾 舟近著奴

二五三

稻日野も行き過ぎがてに思へれば心戀しき可古の鳥見ゆ

(卷三)

柿本人麿

稻日野毛 去過勝爾 思有者 心戀敷 可古能鳥所見

二五四

ともしびの明石大門に入らむ日や榜ぎ別れなむ家のあたり

見ず (卷三)

柿本人麿

留火之 明石大門爾 入日哉 榜將別 家當不見

二五五

天さかる夷の長道ゆ戀ひ來れば明石と門より大和鳥見ゆ

(卷三)

柿本人麿

天離 夷之長道從 戀來者 自明門 倭鳥所見

二五六

飼飯の海には好くあらし刈薦の亂れ出づ見ゆ海人の釣船

(卷三)

柿本人麿

飼飯海乃 庭好有之 刈薦乃 亂出所見 海人釣船

二六四

近江國より上り來る時、宇治河の邊に至りて
もののふの八十氏河の網代木にいさよふ波の行方知らずも

(卷三)

柿本人麿

物乃部能 八十氏河乃 阿白木爾 不知代經浪乃 去邊白不母

苦しくも零り来る雨か神の埼狭野のわたりに家もあらなく
に (卷三) 長 奥 麿

苦毛 零來雨可 神之埼 狭野乃渡爾 家裳不有國

淡海の海夕浪千鳥汝が鳴けば心もしぬにいにしへ思ほゆ
(卷三) 柿 本人 麿

淡海乃海 夕浪千鳥 汝鳴者 情毛思努爾 古所念

驕旅をよめる歌
旅にして物戀しきに山下の赤のそほ船沖に榜ぐ見ゆ (卷三)
高市黒人

客爲而 物戀敷爾 山下 赤乃曾保船 奥榜所見

櫻田へ鶴鳴きわたる年魚市潟潮干にけらし鶴鳴きわたる
(卷三) 高市黒人

櫻田部 鶴鳴渡 年魚市方 鹽干二家良進 鶴鳴渡

何處にか吾は宿らむ高島の勝野の原にこの日暮れなば
(卷三) 高市黒人

何處 吾將宿 高島乃 勝野原爾 此日暮去者

疾く來ても見てましものを山城の高き槻村散りにけるかも
(卷三) 高市黒人

速來而母 見手益物乎 山背 高槻村 散去奚留鴨

つぬさはふ磐余に過ぎず泊瀬山いつかも越えむ夜は更けに
二九

つつ (卷三)

角障經 石村毛不過 泊瀬山 何時毛將超 夜者深去通都

志賀に幸せる時よめる歌

此處にして家やもいづく白雲のたなびく山を越えて來にけり (卷三) 石山卿

二八七

此間爲而 家八方何處 白雲乃 棚引山乎 超而來二家里

初月をよめる歌

天の原ふりさけ見れば白眞弓張りて懸けたり夜路は吉けむ (卷三) 間人大浦

二八九

天原 振離見者 白眞弓 張而懸有 夜路者將吉

風を疾み奥つ白浪高からし海人の釣船濱に歸りぬ (卷三) 角麻呂

二九四

風乎疾 奥津白浪 高有之 海之釣船 濱眷奴

上野國司に任せられし時、駿河淨見埜に至りて

廬原の清見が埜の三保の浦の寛けき見つつもの思ひもなし (卷三) 田口益人

二九六

廬原乃 清見之埜乃 見穂乃浦乃 寛見乍 物念毛奈信

晝見れど飽かぬ田兒の浦大王の命かしくみ夜見つるかも (卷三) 田口益人

二九七

晝見騰 不飽田兒浦 大王之 命恐 夜見鶴鴨

筑紫國つくしのくにに下くだれる時、海路にてよめる歌

大王おほきみの遠とほの朝廷みかどと在あり通がよふ島門しまとを見れば神代かみよし念おもほゆ

(卷三)

柿本人麿

大王之 遠乃朝廷跡 蟻通 島門乎見者 神代之所念

芳野離宮に幸せる時、勅ちうけたまはを奉りてよめる歌

み吉野ゆの 芳野ゆの宮は 山からし 貴たふとくあらし 川からし

清さやけくあらし 天地と 長く久しく 萬代に 變らずあら

む、いでましたの宮(卷三)

大伴旅人

見吉野之 芳野乃宮者 山可良志 貴有師 水可良思 清有師 天地與 長久

萬代爾 不改將有 行幸之宮

反歌

昔見し象きさの小河をを今見ればいよよ清さやけくなりなりにけるかも

昔見之 象乃小河乎 今見者 彌清 成爾來鴨

不盡山を望める歌

天地あまの 分わかれし時ゆ 神かむさびて 高く貴き 駿河なる 布ふ

士じの高嶺を 天あまの原 ふり放さけ見れば 渡る日の 影かげも隠

ろひ 照る月の 光も見えず 白雲も い行き憚り 時じ

くぞ 雪は降りける 語りつぎ 言つひつぎ行かむ 不盡ふじの

高嶺は(卷三)

山部赤人

天地之 分時從 神佐備而 高貴寸 駿河有 布士能高嶺乎 天原 振放見者

度日之 陰毛隱比 照月乃 光毛不見 白雲母 伊去波伐加利 時自久曾 雪者

落家留 語告 言繼將往 不盡能高嶺者

反歌

田兒の浦ゆうち出でて見れば眞白にぞ不盡の高嶺に雪は零りける

田兒之浦從 打出而見者 眞白衣 不盡能高嶺爾 雪者零家留

不盡山をよめる歌

なまよみの 甲斐の國 打ち寄する 駿河の國と ちの 國のみ中ゆ 出で立てる 不盡の高嶺は 天雲も 行き憚り 飛ぶ鳥も 翔びも上らす 燎ゆる火を 雪も て消ち 降る雪を 火もて消ちつつ 言ひもかね 名づけ も知らに 靈しくも 坐す神かも 石花海と 名づけてあ るも その山の 包める海ぞ 不盡河と 人の渡るも そ

の山の 水のたぎちぞ 日本ひのもとの やまとの國の 鎮しづめとも 坐す神かも 寶とも なれる山かも 駿河なる 不盡の高 峰ねは 見れど飽かぬかも (卷三)

高橋 蟲 磨

奈麻余美乃 甲斐乃國 打緣流 駿河能國與 已知其智乃 國之三中從 出立有 不盡能高嶺者 天雲毛 伊去波伐加利 飛鳥母 翔毛不上 燎火乎 雪以滅 落 雪乎 火用消通都 言不得 名不知 靈母 座神香聞 石花海跡 名付而有毛 彼山之 堤有海會 不盡河跡 人乃渡毛 其山之 水乃當焉 日本之 山跡國乃 鎮十方 座神可聞 寶十方 成有山河聞 駿河有 不盡能高嶺者 雖見不飽香聞

反歌

不盡の嶺に零り置ける雪は六月みなづきの十五日ちに消ぬればその夜 降りけり

不盡嶺爾 零置雪者 六月 十五日消者 其夜布里家利

三二一 不盡の嶺を高みかしこみ天雲もい行きはばかり棚引くものを

布士能嶺乎 高見恐見 天雲毛 伊去羽計 田菜引物緒

三二八 あをによし寧樂の京師は咲く花の薫ふがごとく今さかりなり (卷三) 小野老

青丹吉 寧樂乃京師者 咲花乃 薫如 今盛有

三三〇 藤浪の花は盛になりけり平城の京を思ほすや君 (卷三) 大伴四綱

藤浪之 花者盛爾 成來 平城京乎 御念八君

三三一 吾が盛また變若めやもほとほとに寧樂の京を見ずかなりな

む (卷三) 大伴旅人

吾盛 復將變八方 殆 寧樂京師乎 不見歟將成

三三二 わが命も常にあらぬか昔見し象の小河を行きて見むため (卷三) 大伴旅人

吾命毛 常有奴可 昔見之 象小河乎 行見爲

三五八 武庫の浦を榜ぎ回む小舟粟島を背向に見つともしき小舟 (卷三) 山部赤人

武庫浦乎 榜轉小舟 粟島矣 背爾見乍 乏小舟

三六四 塩津山にてよめる歌 丈夫の弓上振り起し射つる矢を後見む人は語り繼ぐがね

丈夫之 弓上振起 射都流矢乎 後將見人者 語繼金

(卷三)

笠金村

大船に眞楫繁貫き大王の命かしくみ磯廻するかも (卷三)

石上大夫

大船二 眞梶繁貫 大王之 御命恐 磯廻爲鴨

和ふる歌

もののふの臣の壯士は大王の任のまにまに聞くと云ふものぞ (卷三)

笠金村歌集

物部乃 臣之壯士者 大王 任乃隨意 聞跡云物會

芳野にてよめる歌

吉野なる夏實の河の川淀に鴨ぞ鳴くなる山かげにして

(卷三)

湯原王

吉野爾有 夏實之河乃 川余村爾 鴨會鳴成 山影爾之氏

驛旅の歌

海若は 靈しきものか 淡路島 中に立て置きて 白浪を
伊豫に回らし 座待月 明石の門ゆは 夕されば 汐を満
たしめ 明けされば 潮を干しむ 潮騒の 浪を恐み 淡
路島 磯隠りみて 何時しかも この夜の明けむと 待つ
からに 寝の宿らえねば 瀧の上の 浅野の雉 明けぬとし
立ち響むらし いざ兒等 敢へて榜ぎ出む にはも静けし

(卷三)

作者不詳

海若者 靈寸物香 淡路島 中爾立置而 白浪乎 伊與爾回之 座待月 開乃門
從者 暮去者 鹽乎令滿 明去者 鹽乎令干 鹽左爲能 浪乎恐美 淡路島 磯
隱居而 何時鴨 此夜乃將明跡 待從爾 寢乃不勝宿者 瀧上乃 淺野之雉 開
去歲 立動良之 率兒等 安倍而榜出牟 爾波母之頭氣師

反歌

鳥傳つたひ敏馬みぬめの埼さきを榜こぎ廻ためば大和戀こほしく鶴多たづさほに鳴く

島傳 敏馬乃埼乎 許藝廻者 日本戀久 鶴左波爾鳴

安積皇子あさかのみこの薨あじ給たまひし時ときよめる歌

あしひきの山さへ光り咲く花の散りぬる如き吾王わがおほきみかも

足繪木乃 山左倍光 咲花乃 散去如寸 吾王香聞

(卷三)

大伴家持

太宰帥大伴卿、大納言に任まかせられて京に入らむとする時に
臨み、府の官人等、卿を筑前國蘆城驛家に餞する歌
月夜つよよし河音かほとさや清けしいざここに行くも去ゆかぬも遊あそびて歸か
む (卷四) 大伴四綱

月夜吉 河音清之 率此間 行毛不去毛 遊而將歸

此間ここのまに在りて筑紫つくしや何處いづく白雲の棚引く山の方かたにしあるらし

(卷四)

大伴旅人

此間在而 筑紫也何處 白雲乃 棚引山之 方西有良思

感情まごころを反かえさしむる歌

父母ちちを見れば尊たかし 妻子めこ見ればめぐし愛あし 世の中よは

斯くぞ道理 鶉鳥の 抱泥しもよ 行方知らねば 穿查を
 脱き棄る如く 踏み脱ぎて 行くちふ人は 石木より 成
 りでし人か 汝が名告らさね 天へ行かば 汝がまにまに
 地ならば 大王います この照らす 日月の下は 天雲の
 向伏す極 谷蟻の さ渡る極 聞し食す 國のまほらぞ
 彼に此に 欲しきまにまに 然にはあらしか

父母乎 美禮婆多布斗斯 妻子美禮婆 米具斯宇都久志 余能奈迦波 加久敘許
 等和理 母智騰利乃 可良波志母與 由久弊斯良禰婆 宇既具都遠 奴伎都流
 其等久 布美奴伎提 由久智布比等波 伊波紀欲利 奈利提志比等迦 奈何名能
 良佐禰 阿米弊由迦婆 奈何麻爾麻爾 都智奈良婆 大王伊麻周 許能提羅周
 日月能斯多波 阿麻久毛能 牟迦夫周伎波美 多爾具久能 佐和多流伎波美 企
 許斯遠周 久爾能麻保良敘 可爾迦久爾 保志伎麻爾麻爾 斯可爾波阿羅慈迦

反歌

ひさかたの天道は遠しなほなほに家に歸りて業を爲まさに

比佐迦多能 阿麻遲波等保斯 奈保奈保爾 伊弊爾可弊利提 奈利乎斯麻佐爾

子等を思ふ歌

瓜食めば 子等思ほゆ 栗食めば 況してしぬばゆ 何處
 より 來りしものぞ 眼交に もとな懸りて 安寝し爲さ
 ぬ (卷五) 山上憶良

宇利波米婆 胡藤母意母保由 久利波米婆 麻斯提斯農波由 伊豆久欲利 枳多
 利斯物能會 麻奈迦比爾 母等奈可利提 夜周伊斯奈佐農

反歌

銀も金も玉も何せむにまされる寶子にしかめやも

銀母 金母玉母 奈爾世武爾 麻佐禮留多可良 古爾斯迦米夜母 四四

梅花をよめる歌

わが苑に梅の花散るひさかたの天より雪の流れ来るかも

(卷五)

大伴旅人

和何則能爾 宇米能波奈知流 比佐可多能 阿米欲里由吉能 那何列久流加母

八二四

梅の花散らまく惜しみ吾が苑の竹の林に鶯鳴くも (卷五)

阿 奥 島

烏梅乃波奈 知良麻久怨之美 和家會乃乃 多氣乃波也之爾 于具比須奈久母

八二五

梅の花咲きたる苑の青柳を縷にしつつ遊び暮らさな (卷五)

土 百 村

八四六

霞立つ長き春日を挿頭せれどいや懐かしき梅の花かも

(卷五)

小野 淡理

可須美多都 那我岐波流卑乎 可謝勢例杵 伊野那都可子岐 烏梅能波奈可毛

好去好來の歌

神代より 言傳て來らく 虚みつ 倭の國は 皇神の 嚴

八九四

しき國 言靈の 幸はふ國と 語り繼ぎ 言ひ繼がひけり

今の世の 人も悉 目の前に 見たり知りたり 人多に

満ちてはあれども 高光る 日の朝廷 神ながら 愛の盛

に 天の下 奏し給ひ 家つ子ら 撰び給ひて 勅旨 載

四五

き持ちて 唐もろこしの 遠き境に 遣はされ 罷り坐せ 海原うなばらの
 邊へにも 奥おくにも 神留かむづまり 領うしほき坐す 諸もろもろの 大御神等たち 船舳ふなのへ
 に 導まをき申し 天地あまの 大御神等たち 倭やまとの 大國靈おほくにたま ひさか
 たの 天あまの御虚みそらゆ 天翔あまがけり 見渡し給ひ 事を了り 還らむ
 日は また更に 大御神等たち 船舳ふなのへに 御手みで打ち懸けて 墨
 繩いづなを 延はへたる如く あちかをし 値嘉ちかの岬さきより 大伴おほともの
 御津みつの濱邊びに 直泊ただはてに 御船みふねは泊てむ 恙つみ無く 幸さいく坐いまし
 て 早歸りませ (卷五)

山上憶良

神代欲理 云傳久良久 虛見通 倭國者 皇神能 伊都久志吉國 言靈能 佐吉
 播布國等 加多利繼 伊比都賀比計理 今世能 人母許等期等 目前爾 見在知
 在 人佐播爾 滿且播阿禮等母 高光 日御朝庭 神奈我良 愛能盛爾 天下
 奏多麻比 家子等 撰多麻比天 勅旨 載持且 唐能 遠境爾 都加播佐禮 麻

加利伊麻勢 宇奈原能 邊爾母奧爾母 神豆麻利 宇志播吉伊麻須 諸能 大御
 神等 船舳爾 道引麻遠志 天地能 大御神等 倭 大國靈 久堅能 阿麻能見
 虛喻 阿麻賀氣利 見渡多麻比 事了 還日者 又更 大御神等 船舳爾 御手
 打掛且 墨繩衰 播倍多留期等久 阿遲可遠志 智可能岬欲利 大伴 御津濱備
 爾 多太泊爾 美船播將泊 都都美無久 佐伎久伊麻志且 速歸坐勢

反歌

大伴の御津みつの松原かき掃はきて 吾われ立ち待たむ早歸りませ

大伴 御津松原 可吉掃且 和禮立待 速歸坐勢

難波津なみのに御船みふね泊はてぬと聞きえ來こば紐解ひもとき放はなけて立走たちりせむ

難波津爾 美船泊農等 吉許延許婆 紐解佐氣且 多知婆志利勢武

男子名は古日を戀ふる歌

世の人の 貴み願ふ 七種の 寶も我は 何爲むに 我が
 間の 生れ出でたる 白玉の 吾が子古日は 明星の 明
 くる朝は 敷妙の 床の邊去らず 立てれども 居れども
 共に戯れ 夕星の 夕になれば いざ寝よと 手を携はり
 父母も 側は勿離り 三枝の 中にを寝むと 愛しく 其
 が語らへば 何時しかも 人と爲り出でて 悪しけくも
 善けくも見むと 大船の 思ひ憑むに 思はぬに 横風の
 爾布敷可爾 覆ひ來れば 爲む術の 爲方を知らに 白妙
 の 手襪を掛け 眞十鏡 手に取り持ちて 天神 仰ぎ乞
 ひ禱み 地祇 伏して額づき かからずも かかりも 神

のまにまにと 立ちあざり 我乞ひ禱めど 須臾も 快け
 くは無しに 漸漸に 容貌つくほり 朝朝 言ふこと止み
 たまきはる 命絶えぬれ 立ちをどり 足摩り叫び 伏し
 仰ぎ 胸打ち嘆き 手に持たる 吾が兒飛ばしつ 世間の
 道 (卷五)

山上憶良

世之人 貴慕 七種之 寶毛我波 何爲 和我中能 産禮出有 白玉之 吾子古
 日者 明星之 開朝者 敷多倍乃 登許能邊佐良受 立禮杼毛 居禮杼毛 登母
 爾戲禮 夕星乃 由布弊爾奈禮婆 伊射爾余登 手乎多豆佐波里 父母毛 表者
 奈佐我利 三枝之 中爾乎爾牟登 愛久 志我可多良倍婆 何時可毛 比等等奈
 理伊旦天 安志家口毛 與家久母見牟登 大船乃 於毛比多能無爾 於毛波奴爾
 横風乃 爾布敷可爾 覆來禮婆 世武須便乃 多杼伎乎之良爾 志路多倍乃 多
 須吉乎可氣 麻蘇鏡 且爾登利毛知且 天神 阿布藝許比乃美 地祇 布之且額
 拜 可加良受毛 可賀利毛 神乃末爾麻仁等 立阿射里 我乞能米登 須臾毛

余家久波奈之爾 漸漸 可多知都久保利 朝朝 伊布許登夜美 靈剋 伊乃多延
奴禮 立乎杼利 足須里佐家婢 伏仰 武禰宇知奈氣吉 手爾持流 安我古登婆
之都 世間之道

五〇

反歌

九〇五

稚ければ道行き知らじ幣は爲む黄泉の使負ひて通らせ

和可家禮婆 道行之良士 末比波世武 之多幣乃使 於比且登保良世

九〇六

布施置きて吾は乞ひ禱む欺かず直に率去きて天路知らしめ

布施於吉且 吾波許比能武 阿射無加受 多太爾率去且 阿麻治思良之米

芳野離宮に幸せる時よめる歌

九〇九

山高み白木綿花に落ちたぎつ瀧の河内は見れど飽かぬかも

山高三 白木綿花 落多藝追 瀧乃河内者一雖見不飽香聞

(卷六)

笠 金 村

紀伊國に幸せる時よめる歌

九一八

奥つ島荒磯の玉藻潮干満ちて隠るひゆかば思ほえむかも

奥島 荒磯之玉藻 潮干満位 隠去者 所念武香聞

(卷六)

山 部 赤 人

九一九

若の浦に潮満ち來れば潟を無み葦邊をさして鶴鳴き渡る

若浦爾 鹽滿來者 瀧乎無美 葦邊乎指天 多頭鳴渡

(卷六)

山 部 赤 人

やすみしし わご大王の 高知らす 芳野の宮は 疊づく
青牆隱り 河次の 清き河内ぞ 春べは 花咲き撓り 秋
されば 霧立ち渡る その山の いや益益に この河の
絶ゆること無く 百磯城の 大宮人は 常に通はむ (卷六)

山部 赤人

八隅知之 和期大王乃 高知爲 芳野宮者 立名附 青牆隱 河次乃 清河内會
春部者 花咲乎遠里 秋去者 霧立渡 其山之 彌益益爾 此河之 絶事無 百
石本能 大宮人者 常將通

反歌二首

み吉野の象山の際の木末には幾許も騒ぐ鳥の聲かも

三吉野乃 象山際乃 木末爾波 幾許毛散和口 鳥之聲可聞

ぬばたまの夜の深けぬれば久木生ふる清き河原に千鳥數鳴

烏玉之 夜乃深去者 久木生留 清河原爾 知鳥數鳴

やすみしし わご大王は み芳野の 蜻蛉の小野の 野の
上には 跡見居ゑ置きて み山には 射部立て渡し 朝獵
に 鹿猪履み起し 夕狩に 鳥蹴み立て 馬竝めて 御獵
ぞ立たす 春の茂野に (卷六)

山部 赤人

安見知之 和期大王波 見芳野乃 飽津之小野笑 野上者 跡見居置而 御山者
射部立渡 朝獵爾 十六履起之 夕狩爾 十里蹴立 馬竝而 御獵會立爲 春之
茂野爾

反歌

あしひきの山にも野にも御獵人得物矢手挟み散動れたり見
ゆ

足引之 山毛野毛 御獵人 得物矢手挟 散動而有所見

播磨國印南郡に幸せる時よめる歌

往きめぐり見とも飽かめや名寸隅の船瀬の濱にしきる白浪

(卷六)

笠 金 村

往回 雖見將飽八 名寸隅乃 船瀬之濱爾 四寸流思良名美

辛荷島を過ぐる時よめる歌

島隠り吾が榜ぎ來れば羨しかも大和へ上る眞熊野の船

(卷六)

山 部 赤 人

島隠 吾榜來者 乏毳 倭邊上 眞熊野之船

風吹けば浪か立たむと伺候に都多の細江に浦隠り居り

(卷六)

山 部 赤 人

風吹者 浪可將立跡 伺候爾 都多乃細江爾 浦隠居

さす竹の大宮人の家と住む佐保の山をば思ふやも君 (卷六)

石 川 足 人

刺竹之 大宮人乃 家跡住 佐保能山乎者 思哉毛君

和 ぶ る 歌

やすみししわが大王の食國は大和も此處も同じとぞ念ふ

(卷六)

大 伴 旅 人

八隅知之 吾大王乃 御食國者 日本毛此間毛 同登會念

藤原宇合卿の西海道節度使に遣さるる時よめる歌

五六

白雲の 龍田の山の 露霜に 色づく時に うち超えて
旅行く君は 五百重山 い行きさぐみ 賊守る 筑紫に至
り 山の極 野の極見よと 伴の部を 班ち遣し 山彦の
應へむ極 谷墓の さ渡る極 國狀を 見し給ひて 冬ご
もり 春さり行かば 飛ぶ鳥の はやく來まさね 龍田道
の 丘邊の路に 丹躑躅の 薫はむ時の 櫻花 咲きなむ
時に 山たづの 迎へ參出む 君が來まさば (卷六)

高橋 蟲麿

白雲乃 龍田山乃 露霜爾 色附時丹 打超而 客行公者 五百隔山 伊去割見
賊守 筑紫爾至 山乃曾伎 野之衣寸見世常 伴部乎 班遣之 山彦乃 將應極
谷潜乃 狹渡極 國方乎 見之賜而 冬木成 春去行者 飛鳥乃 早御來 龍田

道之 岳邊乃路爾 丹管士乃 將薰時能 櫻花 將開時爾 山多頭能 迎參出六
公之來益者

反歌

千萬の軍なりとも言舉せず取りて來ぬべき男とぞ念ふ

(卷六)

高橋 蟲麿

千萬乃 軍奈利友 言舉不爲 取而可來 男常會念

酒を節度使の卿等に賜へる御製

食國の 遠の朝廷に、汝等し 斯く罷りなば 平らけく
吾は遊ばむ 手抱きて 我は御在さむ 天皇朕が うづの
御手以ち 搔撫でぞ 勞ぎたまふ うち撫でぞ 勞ぎたま
ふ 還り來む日 相飲まむ酒ぞ この豊御酒は (卷六)

聖武 天皇

五七

食國 遠乃御朝庭爾 汝等之 如是退去者 平久 吾者將遊 手抱而 我者將御
在 天皇朕 宇頭乃御手以 搔撫會 禰宜賜 打撫會 禰宜賜 將還來日 相飲
酒會 此豊御酒者

反歌

丈夫の行くとふ道ぞ凡ろかに念ひて行くな丈夫の伴

丈夫之 去跡云道會 凡可爾 念而行勿 丈夫之伴

痢に沈める時の歌

士やも空しかるべき萬代に語り續ぐべき名は立てずして

士也母 空應有 萬代爾 語續可 名者不立之而

(卷六)

山上憶良

詔に應ずる歌

御民吾生ける驗あり天地の榮ゆる時に遇へらく念へば

御民吾 生有驗在 天地之 榮時爾 相樂念者

(卷六)

海犬養岡麿

左大辨葛城王等に、姓橘氏を賜へる時の御製の歌

橘は實さへ花さへその葉さへ枝に霜降れどいや常葉の樹

橘者 實左倍花左倍 其葉左倍 枝爾霜雖降 益常葉之樹

(卷六)

聖武天皇

元興寺の僧の自ら嘆く歌

白珠は人に知らえず知らずともよし知らずとも吾し知れら

ば知らずともよし (卷六)

白珠者 人爾不知所 不知友縦 雖不知 吾之知有者 不知友任意

六〇

久爾の新しき京を讚むる歌

山高く川の瀬清し百世まで神しみ行かむ大宮どころ (卷六)

作者 不詳

山高來 川乃湍清石 百世左右 神之味將往 大宮所

月を詠める歌

海原の道遠みかも月讀の明すくなき夜は降ちつつ (卷七)

作者 不詳

海原之 道遠鴨 月讀 明少 夜者更下乍

一〇八一

ぬばたまの夜渡る月をおもしろみ吾が居る袖に露ぞ置きにける (卷七)

作者 不詳

烏玉之 夜渡月乎 何怜 吾居袖爾 露會置爾鶏類

雲を詠める歌

痛足河河浪立ちぬ卷目の齋槻が嶽に雲居立てるらし (卷七)

柿本人麿歌集

痛足河 河浪立奴 卷目之 由槻我高仁 雲居立良志

一〇八八

あしひきの山河の瀬の響るなべに弓月が嶽に雲立ち渡る

(卷七) 柿本人麿歌集

足引之 山河之瀬之 響苗爾 弓月高 雲立渡

六一

大海に島もあらなくに海原のたゆたふ浪に立てる白雲

(卷七)

作者不詳

大海爾 島毛不在爾 海原 絶塔浪爾 立有白雲

山を詠める歌

御室著く三輪山見れば隠口の始瀬の檜原念ほゆるかも

(卷七)

作者不詳

三諸就 三輪山見者 隠口乃 始瀬之檜原 所念鴨

いにしへの事は知らぬを我見ても久しくなりぬ天の香具山

(卷七)

作者不詳

昔者之 事波不知乎 我見而毛 久成奴 天之香具山

河を詠める歌

ぬばたまの夜さり來れば卷目の川音高しも嵐かも疾き

(卷七)

柿本人麿歌集

黒玉之 夜去來者 卷向之 川音高之母 荒足鴨疾

葉を詠める歌

いにしへにありけむ人も吾が如か三輪の檜原に挿頭折りけむ (卷七)

柿本人麿歌集

古爾 有險人母 如吾等架 彌和乃檜原爾 挿頭折兼

鳥を詠める歌

山の際に渡る秋沙のゆきて居むその河の瀬に浪立つなゆめ

(卷七)

作者不詳

山際爾 渡秋沙乃 往將居 其河瀨爾 浪立勿湯目

六四

山背にてよめる歌

宇治河を船渡せをと喚ばへども聞えざるらし楫の音もせず

(卷七)

作者不詳

氏河乎 船令渡呼跡 雖喚 不所聞有之 楫音毛不爲

攝津にてよめる歌

しなが鳥猪名野を來れば有間山夕霧立ちぬ宿は無くして

(卷七)

作者不詳

羈旅にてよめる歌

家離り旅にし在れば秋風の寒き暮に雁鳴きわたる

(卷七)

作者不詳

家離 旅西在者 秋風 寒暮丹 雁喧渡

一一七五

足柄の筥根飛び越え行く鶴のともしき見れば大倭し念ほゆ

(卷七)

作者不詳

足柄乃 筥根飛超 行鶴乃 乏見者 日本之所念

一一七八

印南野は行き過ぎぬらし天づたふ日笠の浦に波たてり見ゆ

(卷七)

作者不詳

印南野者 往過奴良之 天傳 日笠浦 波立見

一一七九

家にして吾は戀ひむな印南野の淺茅が上に照りし月夜を

(卷七)

作者不詳

家爾之氏 吾者將戀名 印南野乃 淺茅之上爾 照之月照乎

六五

珠くしげ見諸戸山たま みもろとやまを行きしかば面白くしていにしへ念ほゆおも

(卷七)

作者不詳

珠匣 見諸戸山矣 行之鹿齒 面白四手 古昔所念

今年行く新島人こひさきもりが麻衣肩じろもの紙まひは誰か取り見む

今年去 新島守之 麻衣 肩乃間亂者 誰取見

懽よろこびの御歌

石灑ぐ垂水いはそそたるみづの上のさ蕨の萌え出づる春になりはるにけるかも

(卷八)

志貴皇子

石灑 垂見之上乃 左和良妣乃 毛要出春爾 成來鴨

うち靡く春來るらし山まの際まの遠き木末こわづの咲き行く見れば

(卷八)

尾張連

打靡 春來良之 山際 遠木末乃 開往見者

春の野のに董採つみにと來し吾ぞ野をなつかしこみ一夜宿ねにける

(卷八)

山部赤人

春野爾 須美禮採爾等 來師吾曾 野乎奈都可之美 一夜宿二來

あしひきの山櫻花ひ日竝ひべて斯かく咲きたらはいと戀こひめやも

(卷八)

山部赤人

足比奇乃 山櫻花 日竝而 如是開有者 甚戀目夜裳

百濟野の芽の古枝に春待つと居りし鶯鳴きにけむかも

(卷八)

山部赤人

百濟野乃 芽古枝爾 待春跡 居之思 鳴爾鷄鷓鴨

蝦鳴く甘南備河にかけ見えて今か咲くらむ山振の花

(卷八)

厚見王

河津鳴 甘南備河爾 陰所見而 今香開良武 山振乃花

鶯をよめる歌

うち霧し雪は零りつつ然すがに吾家の苑に鶯鳴くも

(卷八)

大伴家持

打霧之 雪者零乍 然爲我二 吾宅乃苑爾 則鳥鳴裳

山振の咲きたる野邊のつぼ堇この春の雨に盛なりけり

(卷八)

高田女王

山振之 咲有野邊乃 都保須美禮 此春之雨爾 盛奈里鷄利

入唐使に贈れる歌

玉襷 懸けぬ時無く 氣の緒に 吾が念ふ君は うつせみの
命かしこみ 夕されば 鶴が妻喚ぶ 難波濁 三津の
埼より 大船に 眞楫繁貫き 白浪の 高き荒海を 島傳
ひ い別れ行かば 留まれる 吾は幣引き 齋ひつつ 君
をばやらむ はや還りませ (卷八)

笠金村

玉手次 不懸時無 氣緒爾 吾念公者 虚蟬之 命恐 夕去者 鶴之妻喚 難波
方 三津埼從 大船爾 二楫繁貫 白浪乃 高荒海乎 島傳 伊別往者 留有

吾者幣引 齋乍 公乎者將往 早還萬世

反歌

波の上ゆ見ゆる兒鳥の雲隠りあな氣つかし相別れなば

(卷八) 笠金村

波上從 所見兒鳥之 雲隠 穴氣衝之 相別去者

神名火の磐瀨の杜の霍公鳥毛無の岳に何時か來鳴かむ

(卷八) 志貴皇子

神名火乃 磐瀨乃社之 霍公鳥 毛無乃岳爾 何時來將鳴

我が屋戸に月おし照れり霍公鳥心ある今夜來鳴き響もせ

(卷八) 大伴書持

我屋戸爾 月押照有 霍公鳥 心有今夜 來鳴令響

一四五四

一四六六

一四八〇

七〇

一四九四

霍公鳥を詠める歌

夏山の木末の繁に霍公鳥鳴き響むなる聲の遙けさ

(卷八) 大伴家持

夏山之 木末乃繁爾 霍公鳥 鳴響奈流 聲之遙佐

夕されば小倉の山に鳴く鹿は今夜は鳴かず寐宿にけらしも

(卷八) 舒明天皇

暮去者 小倉乃山爾 鳴鹿之 今夜波不鳴 寐宿家良思母

今朝の朝明雁が音聞きつ春日山黄葉にけらし吾が情痛し

(卷八) 穗積皇子

今朝之且開 雁之鳴聞都 春日山 黄葉家良思 吾情痛之

一五二三

一五二一

七一

秋の野の花を詠める歌

秋の野のに咲きたる花を指折およびりかき數ふれば七種ななくさの花

(卷八)

山上憶良

秋野爾 咲有花乎 指折 可伎數者 七種花

一五三八

芽子をの花尾花おななくさ葛花くず瞿麥くさの花女郎花をみなへしまた藤袴あさ朝貌がほの花

(卷八)

山上憶良

芽之花 乎花葛花 瞿麥之花 姫部志 又藤袴 朝貌之花

一五三九

秋の田の穂ほ田たを雁かりが音ね闇くらやみに夜のほどろにも鳴き渡るかも

(卷八)

聖武天皇

秋田乃 穂田乎雁之鳴 闇爾 夜之穂籽呂爾毛 鳴渡可聞

一五五〇

鳴鹿をよめる歌

秋芽の散りの亂みだれに呼び立てて鳴くなる鹿の聲の遙けさ

(卷八)

湯原王

秋芽之 落乃亂爾 呼立而 鳴奈流鹿之 音遙者

一五五二

蟋蟀をよめる歌

夕月ゆづ夜心よもしのに白露の置くこの庭に蟋蟀こほろぎ鳴くも

(卷八)

湯原王

暮月夜 心毛思努爾 白露乃 置此庭爾 蟋蟀鳴毛

一五五五

秋立ちて幾日いくかもあらねばこの宿ねぬる朝明あさけの風は手本たもと寒しも

(卷八)

安貴王

秋立而 幾日毛不有者 此宿流 朝開之風者 手本寒母

春日野に時雨ふる見ゆ明日よりは黄葉挿頭さむ高圓の山

(卷八)

藤原八束

春日野爾 鐘禮零所見 明日從者 黄葉頭刺牟 高圓乃山

あしひきの山の黄葉今夜もか浮び去ぬらむ山川の瀬に

(卷八)

大伴書持

足引乃 山之黄葉 今夜毛加 浮去良武 山河之瀬爾

雪をよめる歌

大口の眞神の原に零る雪は甚くな零りそ家もあらなくに

(卷八)

舍人娘子

大口能 眞神之原爾 零雪者 甚莫零 家母不有國

左大臣長屋王の佐保の宅に御在して肆宴の御製の歌

はだ薄尾花逆葺き黒木用ち造れる室は萬代までに (卷八)

元正天皇

波太須珠寸 尾花逆葺 黒木用 造有室者 迄萬代

あをによし奈良の山なる黒木用ち造れる室は坐れど飽かぬ

聖武天皇

かも (卷八)

青丹吉 奈良乃山有 黒木用 造有室者 雖居座不飽可聞

冬の日雪を見て京を憶ふ歌

決雪のほどろほどろに零り重けば平城の京し念ほゆるかも

(卷八)

大伴旅人

沫雪 保杵呂保杵呂爾 零敷者 平城京師 所念可聞

宇治河にてよめる歌

巨椋おほくらの入江響まむなり射部人いめびとの伏見が田井に鴈渡かりるらし

(卷九)

柿本人麿歌集

巨椋乃 入江響奈理 射目人乃 伏目何田井爾 鴈渡良之

一六九九

弓削皇子に獻れる歌

さ夜中と夜は深ふかけぬらし鴈が音ねの聞ゆる空に月渡る見ゆ

(卷九)

柿本人麿歌集

佐宵中等 夜者深去良斯 鴈音 所聞空 月渡見

一七〇一

舍人皇子に獻れる歌

うちたをり多武たむの山霧しげみかも細川の瀬に波の騒げる

(卷九)

柿本人麿歌集

球手折 多武山霧 茂鴨 細川瀬 波驟祢留

一七〇四

弓削皇子に獻れる歌

御食向みけむかふ南淵山みなぶちの巖には落おりしはだれか消え残りたる

(卷九)

柿本人麿歌集

御食向 南淵山之 巖者 落波太列可 削遺有

一七〇九

芳野の離宮に幸せる時の歌

落ち激たぎち流るる水の磐いはに觸り淀める淀に月の影見ゆ

(卷九)

作者不詳

七七

一七一四

槐本の歌

一七一五

樂浪の比良山風の海吹けば釣する海人の袂かへる見ゆ(卷九)

樂浪之 平山風之 海吹者 釣爲海人之 袂變所見

水江浦島子を詠める歌

一七四〇

春の日の霞める時に 住吉の岸に出で居て 釣船の
とをらふ見れば 古の事ぞ念ほゆる 水江の浦島兒
が 堅魚釣り 鯛釣り矜り 七日まで 家にも來ずて 海
界を 過ぎて傍ぎ行くに 海若の 神の女に 避に い傍ぎ
向ひ あひとぶらひ こと成りしかば かき結び 常世に

至り 海若の 神の宮の 内の重の 妙なる殿に 携はり
二人入り居て 老もせず 死もせずして 永き世に 在り
けるものを 世の中の 愚人の 吾妹子に 告りて語らく
須臾は 家に歸りて 父母に 事も告らひ 明日の如 吾
は來なむと 言ひければ 妹がいへらく 常世邊に また
歸り來て 今のごと 逢はむとならば この篋 開くな努
と 許多に 堅めし言を 住吉に 還り來りて 家見れど
家も見かねて 里見れど 里も見かねて 恠しと そこに
念はく 家ゆ出でて 三歳の間 牆も無く 家滅せめや
と この篋を 開きて見れば 舊の如 家はあらむと 玉
篋 少し開くに 白雲の 箱より出でて 當世方に 棚引

きぬれば 立ち走り 叫び袖振り 反側び 足ずりしつつ
たちまちに 情消失せぬ 若かりし 膚も皺みぬ 黒かり
し 髪も白けぬ ゆなゆなは 氣さへ絶えて 後つひに

壽死にける 水江の 浦島子が 家地見ゆ

春日之 霞時爾 墨吉之 岸爾出居而 釣船之 得乎良布見者 古之 事會所念
水江之 浦島兒之 堅魚釣 鯛釣矜 及七日 家爾毛不來而 海界乎 過而榜行
爾 海若 神之女爾 選爾 伊許藝趁 相誂良比 言成之賀婆 加吉結 常代爾
至 海若 神之宮乃 內隔之 細有殿爾 携 二人入居而 耆不爲 死不爲而
永世爾 有家留物乎 世間之 愚人之 吾妹兒爾 告而語久 須臾者 家歸而
父母爾 事毛告良比 如明日 吾者來南登 言家禮婆 妹之答久 常世邊爾 復
變來而 如今 將相跡奈良婆 此箇 開勿勤常 會己良久爾 堅目師事乎 墨吉
爾 還來而 家見跡 家毛見金手 里見跡 里毛見金手 佐常 所許爾念久 從
家出而 三歲之間爾 牆毛無 家滅目八跡 此箇乎 開而見手齒 如本 家者將

有登 玉篋 小披爾 白雲之 自箱出而 常世邊 棚引去者 立走 叫袖振 反
側 足受利四管 頓 情消失奴 若有之 皮毛皺奴 黒有之 髮毛白斑奴 由奈
由奈波 氣左倍絶而 後遂 壽死祁流 水江之 浦島之子 家地見

反歌

常世邊に住むべきものを劔刀己が心から鈍やこの君

常世邊 可住物乎 劔刀 己之心柄 於會也是君

霍公鳥を詠める歌

鷹の 生卵の中に ほととぎす ひとり生れて 己が父
に 似ては鳴かず 己が母に 似ては鳴かず 卵の花の 咲
きたる野邊ゆ 飛び翻り 來鳴き響もし 橘の 花を居散
らし 終日に 鳴けど聞きよし 幣はせむ 遠くを行きそ

吾が屋戸の花橋に 住み渡れ鳥 (卷九)

作者 不詳

罵之 生卵乃中爾 霍公鳥 獨所生而 己父爾 似而者不鳴 己母爾 似而者不鳴 宇能花乃 開有野邊從 飛翻 來鳴令響 橋之 花乎居令散 終日 雖喧聞 吉 幣者將爲 遐莫去 吾屋戸之 花橋爾 住渡鳥

反歌

かき霧し雨の零る夜を霍公鳥鳴きて行くなり何怜その鳥

攝霧之 雨零夜乎 霍公鳥 鳴而去成 何怜其鳥

一七五六

天平五年癸酉、遣唐使の舶、難波を發ちて海に入る時、親母の子に贈れる歌
秋萩を 妻問ふ鹿こそ 一子に 子持たりといへ 鹿兒じもの 吾が獨子の 草枕 旅にし行けば 竹珠を 繁に貫

一七九〇

き垂り 齋戸に 木綿取り垂でて 齊ひつつ 吾が思ふ吾子 眞幸くありこそ (卷九) 作者 不詳

秋葉子乎 妻問鹿許會 一子二 子持有跡五十戸 鹿兒自物 吾獨子之 草枕 客二師往者 竹珠乎 密貫垂 齋戸爾 木綿取四手而 忌日管 吾思吾子 眞好 去有欲得

反歌

旅人の宿りせむ野に霜降らば吾が子羽ぐくめ天の鶴群

客人之 宿將爲野爾 霜降者 吾子羽鬣 天乃鶴群

一七九一

ひさかたの天の香具山このゆふべ霞たなびく春立つらしも

(卷十)

柿本人麿歌集

久方之 天芳山 此夕 霞霏霰 春立下

一八二六

玉かぎる夕さり來れば獵人の弓月が嶽に霞たなびく(卷十)

柿本人麿歌集

玉蜻 夕去來者 佐豆人之 弓月我高荷 霞霏霰

一八二一

春霞流るるなべに青柳の枝啄ひ持ちて鶯鳴くも(卷十)

作者不詳

春霞 流共爾 青柳之 枝啄持而 鶯鳴毛

一八四〇

梅が枝に鳴きて移ろふ鶯の羽白妙に沫雪ぞ降る(卷十)

作者不詳

梅枝爾 鳴而移徙 鶯之 翼白妙爾 沫雪曾落

花を詠める歌

うち靡く春さり來らし山の際の遠き木末の咲き行く見れば

(卷十) 作者不詳

一八六五

打塵 春避來之 山際 最木末之 咲往見者

一八七三

いつしかもこの夜の明けむ鶯の木傳ひ散らす梅の花見む

(卷十) 作者不詳

何時鴨 此夜之將明 鶯之 木傳落 梅花將見

花を詠める歌

眞葛原なびく秋風吹くごとに阿太の大野の萩が花散る(卷十)

作者不詳

二〇九六

眞葛原 名引秋風 吹毎 阿太乃大野之 芽子花散

雁を詠める歌

秋風に大和へ越ゆる鴈がねはいや遠さかる雲がくりつつ

(卷十) 作者不詳

二二二八

秋風爾 山跡部越 鴈鳴者 射矢遠放 雲隱筒

蟋蟀を詠める歌

秋風の寒く吹くなべ吾が屋前の浅茅がもとに蟋蟀鳴くも

秋風之 寒吹奈倍 吾屋前之 浅茅之本 蟋蟀鳴毛

(卷十)

作者不詳

蟋蟀を詠める歌

庭草に村雨ふりてこほろぎの鳴く聲聞けば秋づきにけり

庭草爾 村雨落而 蟋蟀之 鳴音聞者 秋付爾家里

(卷十)

作者不詳

露を詠める歌

秋萩の枝もとををに露霜置き寒くも時はなりにけるかも

(卷十)

作者不詳

黄葉をよめる歌

九月の時雨の雨にぬれとほり春日の山は色づきにけり(卷十)

九月乃 鐘禮乃雨丹 沾通 春日之山者 色付丹來

作者不詳

黄葉を詠める歌

大坂を吾が越え來れば二上にもみぢ葉流る時雨ふりつつ

大坂乎 吾越來者 二上爾 黄葉流 志具禮零乍

(卷十)

作者不詳

黄葉を詠める歌

吾が門の浅茅色づく吉隠の浪柴の野のもみぢ散るらし(卷十)

吾門之 淺茅色就 吉魚強能 浪柴乃野之 黃葉散良新

八八

作者不詳

月を詠める歌

思はぬに時雨の雨は零りたれど天雲霽れて月夜さやけし

不念爾 四具禮乃雨者 零有跡 天雲霽而 月夜清焉

(卷十)

作者不詳

あしひきの山かも高き卷向の岸の子松にみ雪降り來る

(卷十)

柿本人麿歌集

足曳之 山鴨高 卷向之 木志乃子松二 三雪落來

卷向の檜原もいまだ雲居ねば子松が末ゆ沫雪流る(卷十)

柿本人麿歌集

卷向之 檜原毛未 雲居者 子松之末由 沫雪流

あしひきの山道も知らず白檀の枝もとををに雪の降れば

(卷十)

柿本人麿歌集

足引 山道不知 白杜杖 枝母等乎乎爾 雪落者

花をよめる歌

誰が苑の梅の花ぞもひさかたの清き月夜に幾許散り來る

(卷十)

作者不詳

誰苑之 梅花毛 久堅之 清月夜爾 幾許散來

彼に此に物は念はず飛驒人の打つ墨繩のただ一道に

(卷十一)

作者不詳

八九

二二二七

二二二三

二二二四

二二二五

二二二五

二六四八

云云 物者不念 斐太人乃 打墨繩之 直一道二

三〇四二

朝日さす春日の小野に置く露の消ぬべき吾が身惜しけくも
なし (卷十二) 作者不詳

朝日指 春日能小野爾 置露乃 可消吾身 惜雲無

羈旅に思を發せる歌

三一五三

み雪ふる越の大山行き過ぎていづれの日にかわが里を見む
(卷十二) 作者不詳

三雪零 越乃大山 行過而 何日可 我里乎將見

三二二二

三諸は 人の守る山 本邊は 馬酔木花開き 末邊は 椿
花開く うら麗し山ぞ 泣く兒守る山 (卷十三) 作者不詳

三諸者 人之守山 本邊者 馬酔木花開 末邊方 椿花開 浦妙山會 泣兒守山

三二三八

相坂をうち出て見れば淡海の海白木綿花に浪立ち渡る
(卷十三) 作者不詳

相坂乎 打出而見者 淡海之海 白木綿花爾 浪立渡

三二三九

近江の海 泊八十あり 八十島の 島の埼埼 在り立てる
花橋を 末枝に 竊引き懸け 仲つ枝に 斑鳩懸け 下枝に
ひめを懸け 己が母を 捕らくを知らに 己が父を 捕らく
を知らに いそばひ居るよ 斑鳩とひめと (卷十三) 作者不詳

近江之海 泊八十有 八十島之 島之埼邪伎 安利立有 花橋乎 末枝爾 毛知
引懸 仲枝爾 伊加流我懸 下枝爾 比米乎懸 己之母乎 取久乎不知 己之文乎
取久乎思良爾 伊蘇婆比座與 伊加流我等比米登

葦原の水穂の國は 神ながら 言舉せぬ國 然れども
 言舉ぞ吾がする 言幸く 眞福く坐せと 恙なく 福く坐
 さば 荒磯浪 ありても見むと 百重波 千重浪にしき
 言舉す吾は 言舉す吾は (卷十三) 柿本人麿歌集

葦原 水穂國者 神在隨 事舉不爲國 雖然 辭舉叙吾爲 言幸 眞福座跡 恙
 無 福座者 荒磯浪 有毛見登 百重波 千重浪爾敷 言上爲吾 言上爲吾

反歌

敷島の日本の國は言靈の佐くる國ぞま福くありこそ

志貴島 倭國者 事靈之 所佐國叙 眞福在與其

上總國の歌

夏麻引く海上瀉の沖つ渚に船はとどめむさ夜ふけにけり

(卷十四)

作者 不詳

奈都素妣久 宇奈加美我多能 於伎都渚爾 布彌波等杼米牟 佐欲布氣爾家里

信濃國の歌

信濃なる須賀の荒野にほととぎす鳴く聲きけば時過ぎにけり

(卷十四)

作者 不詳

信濃奈流 須我能安良能爾 保登等藝須 奈久許惠伎氣婆 登伎須疑爾家里

都武賀野に鈴が音きこゆ上志太の殿の仲子し鳥狩すらしも

(卷十四)

作者 不詳

都武賀野爾 須受我於等伎許由 可牟思太能 等能乃奈可知師 登我里須良思母

おもしろき野をばな焼きそ古草に新草まじり生ひは生ふる
かに (卷十四) 作者不詳

於毛思路伎 野乎婆奈夜吉曾 布流久左爾 仁比久佐麻自利 於非波於布流我爾

防人の歌

防人に立ちし朝けの金門出に手放れ惜しみ泣きし兒らはも

(卷十四)

作者不詳

佐伎母理爾 多知之安佐氣乃 可奈刀低爾 手婆奈禮乎思美 奈吉思兒良婆母

雲をよめる歌

あをによし奈良の都にたなびける天の白雲見れど飽かぬか
も (卷十五) 作者不詳

安乎爾余志 奈良能美夜古爾 多奈妣家流 安麻能之良久毛 見禮舒安可奴加毛

長門浦より舶出せし夜、月光を仰ぎ観てよめる歌

山の端に月かたぶけば漁する海人のともしび沖になづさふ
(卷十五) 作者不詳

山乃波爾 月可多夫氣婆 伊射里須流 安麻能等毛之備 於伎爾奈都佐布

佐婆の海中忽逆風漲浪に遇ひ漂流し經宿して後、幸に順
風を得、豊前國下毛郡分間浦に到着す 是に艱難を追ひ
恒み悽惻してよめる歌

大君の命恐み大船の行きのまにまにやどりするかも (卷十五)

雪宅磨

於保伎美能 美許等可之故美 於保夫禰能 由伎能麻爾末爾 夜舒里須流可母

海原の沖邊に燭し漁る火は明して燭せ大和島見む (卷十五)

作者不詳

宇奈波良能 於伎做爾等毛之 伊射流火波 安可之且登母世 夜麻登思麻見無

三六四八

對馬島の淺茅浦に到りて舶泊てし時、順風を得ず、經停
まること五箇日。ここに物華を瞻望し、各働心を陳べて
よめる歌

百船の泊つる對馬の淺茅山時雨の雨にもみだひにけり

(卷十五)

作者不詳

毛母布禰乃 波都流對馬能 安佐治山 志具禮能安米爾 毛美多比爾家里

三六九七

竹敷浦に舶泊てし時、各心緒を陳べてよめる歌

竹敷のうへかた山は紅の八入の色になりけるかも

(卷十五)

大藏磨

多可思吉能 宇敷可多山者 久禮奈爲能 也之保能伊呂爾 奈里爾家流香聞

三七〇三

伊夜彦おのれ神さび青雲の棚引く日すら霖そほ零る

(卷十六)

作者不詳

伊夜彦 於能禮神佐備 青雲乃 田名引日須良 霖曾保零

三八八三

獨平城の故宅に居てよめる歌

杜若衣に摺りつけ丈夫のきそひ獵する月は來にけり

(卷十七)

大伴家持

三九二一

加吉都播多 衣爾須里都氣 麻須良雄乃 服會比獵須流 月者伎爾家里

詔に應ずる歌

降る雪の白髪までに大皇に仕へまつれば貴くもあるか

(卷十七)

橘 諸 兄

布流由吉乃 之路髮麻泥爾 大皇爾 都可倍麻都禮婆 貴久母安流香

詔に應ずる歌

天の下すでに覆ひて降る雪の光を見ればたふとくもあるか

(卷十七)

紀 清 人

天下 須泥爾於保比底 布流雪乃 比加里乎見禮婆 多數刀久母安流香

詔に應ずる歌

新しき年のはじめに豊の年しるすとならし雪の降れるは

(卷十七)

葛井 諸 會

新年乃婆自米爾 豊乃登之 思流須登奈良思 雪能敷禮流波

詔に應ずる歌

大宮の内にも外にも光るまで零らす白雪見れど飽かぬかも

(卷十七)

大伴 家 持

大宮之 宇知爾毛刀爾毛 比賀流麻泥 零須白雪 見禮杼安可奴香聞

珠洲郡より發船して治布に還りし時、長濱灣に泊てて月

光を仰ぎ見てよめる歌

珠洲の海に朝びらきして漕ぎ來れば長濱灣に月照りにけり

(卷十七)

大伴家持

珠洲能宇美爾 安佐比良伎之底 許藝久禮婆 奈我波麻能宇良爾 都奇底理爾家
里

四〇五八

橘のとをのたちばな彌つ代にも我は忘れじこの橘を

(卷十八)

元正天皇

多知婆奈能 登乎能多知波奈 夜都代爾母 安禮波和須禮自 許乃多知婆奈乎

四〇五九

橘の下照る庭に殿建てて酒宴います我が大君かも (卷十八)

河内女王

多知婆奈能 之多泥流爾波爾 等能多豆天 佐可爾豆伎伊麻須 和我於保伎美可
母

四〇九四

陸奥國より金を出せる詔書を賀ぐ歌

葦原の 瑞穂の國を 天降り しらしめしける 天皇の

神の命の 御代重ね 天の日嗣と しらし來る 君の御代

御代 敷きませる 四方の國には 山河を 廣み淳みと

奉る 御調寶は 數へ得ず 盡しも兼ねつ 然れども 吾

大王の諸人を 誘ひ給ひ 善き事を 始め給ひて 金かも

樂しけくあらむと 思ほして 下惱ますに 鶏が鳴く 東

の國の 陸奥の 小田なる山に 金ありと 奏し賜へれ

御心を 明らかめ給ひ 天地の 神相納受ひ 皇御祖の 御靈

助けて 遠き代に かかりし事を 朕が御世に 顯してあ

れば 食國は 榮えむものと 神ながら 思ほし召して

もののふの 八十伴の雄を まつろへの むけのまにまに
 老人も 女童兒も 其が願ふ 心足ひに 撫で給ひ 治め
 給へば 此をしも あやに貴み 嬉しけく 愈思ひて 大
 伴の 遠つ神祖の 其の名をば 大來目主と 負ひ持ちて
 仕へし官 海行かば 水漬く屍 山行かば 草生す屍 大
 皇の 邊にこそ死なぬ 顧みは 爲じと言立て 丈夫の
 清き彼の名を 古よ 今の現に 流さへる 祖の子等ぞ
 大伴と 佐伯の氏は 人の祖の 立つる言立 人の子は
 親の名絶たず 大君に 奉仕ふものと 言ひ繼げる 言の
 職ぞ 梓弓 手に取り持ちて 劍大刀 腰に取り佩き 朝
 守り 夕の守りに 大王の 御門の守護 我をおきて ま

た人はあらじと 彌立て 思ひし増る 大皇の 御言の幸
 の 聞けば貴み (卷十八) 大伴家持

葦原能 美豆保國乎 安麻久太利 之良志賣之家流 須賣呂伎能 神乃美許等能
 御代可佐禰 天乃日嗣等 之良志久流 伎美能御代御代 之伎麻世流 四方國爾
 波 山河乎 比呂美安都美等 多且麻豆流 御調賣波 可蘇倍衣受 都久之毛可
 禰都 之加禮騰母 吾大王能 毛呂比登乎 伊射奈比多麻比 善事乎 波自米多
 麻比且 久我禰可毛 多能之氣久安良牟登 於母保之且 之多奈夜麻須爾 鷄鳴
 東國能 美知能久乃 小田在山爾 金有等 麻宇之多敏禮 御心乎 安吉良米多
 麻比 天地乃 神安比宇豆奈比 皇御祖乃 御靈多須氣且 遠代爾 可里之許
 登乎 朕御世爾 安良波之且安禮婆 食國波 左可延牟物能等 可牟奈我良 於
 毛保之賣之且 毛能乃布能 八十伴雄乎 麻都呂倍乃 牟氣乃麻爾麻爾 老人毛
 女童兒毛 之我願 心太良比爾 撫賜 治賜婆 許已乎之母 安夜爾多敷刀美
 宇禮之家久 伊余與於母比且 大伴能 遠都神祖乃 其名乎婆 大來目主登 於
 比母知且 都加倍之官 海行者 美都久屍 山行者 草牟須屍 大皇乃 敵爾許

會死米 可弊里見波 勢自等許等大且 大夫乃 伎欲吉彼名乎 伊爾之敵欲 伊
麻乃乎追通爾 奈我佐敵流 於夜能子等毛會 大伴等 佐伯氏者 人祖乃 立流
辭立 人子者 祖名不絶 大君爾 麻都呂布物能等 伊比都雅流 許等能都可佐
會 梓弓 手爾等里母知且 劍大刀 許之爾等里波伎 安佐麻毛利 由布能麻毛
利爾 大王能 三門乃麻毛利 和禮乎於吉且 且比等波安良自等 伊夜多且 於
毛比之麻左流 大皇乃 御言能左吉乃 聞者貴美

反歌

大伴の遠つ神祖の奥津城は著く標立て人の知るべく

大伴能 等保追可牟於夜能 於久都奇波 之流久之米多底 比等能之流倍久

天皇の御代榮えむと東なるみちのく山に金花咲く

須賣呂伎能 御代佐可延牟等 阿頭麻奈流 美知能久夜麻爾 金花佐久

天平感寶元年閏五月六日以來、小旱を起して、百姓の田
畝稍凋める色あり、六月朔日に至りて、忽ち雨雲の氣を
見、仍りてよめる雲の歌

天皇の 敷きます國の 天の下 四方の道には 馬の蹄
い盡す極 船の舳の い泊つるまでに 古よ 今の現に
萬調 奉る長上と 作りたる 其の農業を 雨降らず 日
の重なれば 植ゑし田も 蒔きし畠も 朝ごとに 凋み枯
れ行く 其を見れば 心を痛み 緑兒の 乳乞ふがごとく
天つ水 仰ぎてぞ待つ あしひきの 山のたをりに 彼の
見ゆる 天の白雲 海神の 沖つ宮邊に 立ち渡り との曇
り合ひて 雨も賜はね (卷十八)

大伴家持

須賣呂伎能 之伎麻須久爾能 安米能之多 四方能美知爾波 宇麻乃都米 伊都
 久須伎波美 布奈乃倍能 伊波都流麻泥爾 伊爾之敵欲 伊麻乃乎都頭爾 萬調
 麻都流都可佐等 都久里多流 會能奈里波比乎 安米布良受 日能可左奈禮波
 宇惠之田毛 麻吉之波多氣毛 安佐其登爾 之保美可禮由苦 會乎見禮婆 許已
 呂乎伊多美 彌騰里兒能 知許布我其登久 安麻都美豆 安布藝豆會麻都 安之
 比奇能 夜麻能多乎理爾 許能見由流 安麻能之良久母 和多都美能 於枳都美
 夜敵爾 多知和多里 等能具毛利安比且 安米母多麻波爾

反歌

この見ゆる雲ほびこりてとの曇り雨も降らぬか心足ひに

許能美由流 久毛保妣許里且 等能具毛理 安米毛布良奴可 許已呂太良比爾

遙に江を浜る船人の唱を聞く歌

朝床あそに聞けば遙とほけし射水河朝漕あそぎしつつ唱うたふ船人（卷十九）

大伴家持

朝床爾 聞者遙之 射水河 朝已藝思都追 唱船人

勇士の名を振ふを慕ふ歌

ちちの實みの 父の命みこと 柞葉はらの 母の命みこと 凡たゞろかに 情盡こころし
 て 念おもふらむ その子なれやも 丈夫まさや 空しくあるべき
 梓弓すゐ 末振すゐり起し 投矢な以もち 千尋ちひろ射渡し 劍刀つるぎたち 腰こしに取
 り佩はき あしひきの 八峰やつ踏をみ越え 差任さしくる 情障こころざやらず
 後の代の 語り繼ぐべく 名を立つべしも（卷十九）

大伴家持

知智乃實乃 父能美許等 波播蘇葉乃 母能美已等 於保呂可爾 情盡而 念良
 牟 其子奈禮夜母 大夫夜 無奈之久可在 梓弓 須惠布理於許之 投矢毛知

千尋射和多之 劍刀 許思爾等理波伎 安之比奇能 八峰布美越 左之麻久流
情不障 後代乃 可多利都具倍久 名乎多都倍志母

反歌

四一六五 丈夫まさらそは名をし立つべし後の代に聞き繼ぐ人も語り續ぐかね

大夫者 名乎之立倍之 後代爾 聞繼人毛 可多里都具我爾

四一九九

布勢水海に遊覽し、船を多た祐このうら灣に泊めて、藤花を望み見
て各おもひ懷を述べてよめる歌

藤浪の影なす海の底清み沈しづ著く石をも珠たまとぞ吾が見る

(卷十九)

大伴家持

藤奈美能 影成海之 底清美 之都久石乎毛 珠等曾吾見流

四二〇六

還る時濱の上にて月光を仰ぎ見てよめる歌

澁しよたに溪をさして吾が行くこの濱に月夜つよ飽きてむ馬しよ暫し停とどめ

(卷十九)

大伴家持

之夫多爾乎 指而吾行 此濱爾 月夜安伎氏牟 馬之末時停息

天皇に奉れる歌

四二三五 天雲あまぐもをほろに踏みあたし鳴神なるかみも今日けふに益まさりて恐かしこけめやも

(卷十九)

縣犬養三千代

天雲乎 富呂爾布美安多之 鳴神毛 今日爾益而 可之古家米也母

四二四〇 春日にて神を祭る日入唐大使藤原朝臣清河に賜ふ御歌
大船おほぶねに眞ま楫かぢ繁しげ貫ぬき此の吾子あを韓から國へ遣やる齊いはへ神たち

(卷十九)

藤原太后

大船爾 眞梶繁貫 此吾子乎 韓國邊遣 伊波敏神多智

四二六〇

皇は神にし坐せば赤駒の匍匐ふ田井を京師となしつ

(卷十九)

大伴御行

皇者 神爾之座者 赤駒之 腹婆布田爲乎 京師跡奈之都

四二六一

大王は神にし坐せば水鳥の多集く水沼を皇都と爲しつ

(卷十九)

作者未詳

大王者 神爾之座者 水鳥乃 須太久水奴麻乎 皇都常成都

衛門督大伴古慈悲宿禰の家にて、入唐副使同じき胡磨宿禰等を餞せる歌

四二六二

韓國に往き足らはして歸り來む丈夫武雄に御酒たてまつる

(卷十九)

多治比麻主

韓國爾 由伎多良波之丘 可敵里許牟 麻須良多家乎爾 美伎多氏麻都流

四二六四

從四位上高麗朝臣福信に勅して、難波に遣し、酒肴を入唐使藤原朝臣清河等に賜へる御製の歌

空みつ 倭の國は 水の上は 地往く如く 船の上は 床
に坐る如く 大神の 鎮へる國ぞ 四の船 船の舳竝べ 平
安けく 早渡り來て 返言 奏さむ日に 相まむ酒ぞ 斯
の豊御酒は (卷十九) 孝謙天・皇

虚見都 山跡乃國波 水上波 地往如久 船上波 床座如 大神乃 鎮在國會
四船 船能倍奈良倍 平安 早渡來而 還事 奏日爾 相飲酒會 斯豊御酒者

四二七一

左大臣橘朝臣の宅に在して、肆宴（七上のあかり）きこしめす歌

松かげの清き濱邊に玉敷かば君來まさむか清き濱邊に

（卷十九）

藤原八束

松影乃 清濱邊爾 玉敷者 君伎麻佐牟可 清濱邊爾

四二七五

新嘗會（にひなへまつり）の肆宴に、詔に應ずる歌

天地と久しきまでに萬代に仕へまつらむ黒酒白酒を

（卷十九）

文屋智奴麿

天地與 久萬氏爾 萬代爾 都可倍麻都良牟 黒酒白酒乎

四二八四

治部少輔石上朝臣宅嗣（いそのかみ）の家にて宴（うたげ）せる歌

新（あた）しき年の始に思ふどちい群れて居れば嬉しくもあるか

（卷十九）

道祖王

新年始爾 思共 伊牟禮氏乎禮婆 宇禮之久母安流可

四二九〇

興に依りて作れる歌二首

春の野に霞たなびきうらがなしこの夕かげにうぐひす鳴く

も（卷十九）

大伴家持

春野爾 霞多奈妣伎 宇良悲 許能暮影爾 罵奈久母

四二九一

わがやどのいささ群竹（むらたけ）吹く風の音のかそけきこの夕（ゆふへ）かも

（卷十九）

大伴家持

和我屋度能 伊佐左村竹 布久風能 於等能可蘇氣伎 許能由布敷可母

四三二八

大君の命（みこと）かしこみ磯に觸り海原（うみはら）渡る父母を置きて

(卷二十)

文部人麿

於保吉美能 美許等可之古美 伊蘇爾布理 宇乃波良和多流 知知波波乎於伎且

四三四二

眞木柱讚めて造れる殿の如いませ母刀自面變りせず

(卷二十)

坂田部麿

麻氣波之良 寶米且豆久禮留 等乃能其等 已麻勢波波刀自 於米加波利勢受

四三四四

忘らむと野行き山行き我來れど我が父母は忘れせぬかも

(卷二十)

商長麿

和須良牟砥 努由伎夜麻由伎 和例久禮等 和我知知波波波 和須例勢努加毛

四三七三

今日よりは顧みなくて大君の醜の御楯と出で立つ吾は

(卷二十)

今率部與會布

祢布與利波 可敵里見奈久且 意富伎美乃 之許乃美多且等 伊邊多都和例波

四三七四

天地の神を祈りて幸矢貫き筑紫の鳥をさして行く吾は

(卷二十)

大田部荒耳

阿米都知乃 可美乎伊乃里且 佐都夜奴伎 都久之乃之麻乎 佐之且伊久和例波

四三七五

津の國の海のなぎさに船装ひ發し出も時に母が目もかも

(卷二十)

文部足人

都乃久爾乃 宇美能奈伎佐爾 布奈餘會比 多志涅毛等伎爾 阿母我米母我母

四三八三

松の木けの竝なみたる見れば家人はびとの吾わがを見送ると立たりし如もころ

(卷二十)

物部眞島

麻都能氣乃 奈美多流美禮婆 伊波妣等乃 和例乎美於久流等 多多理之母己呂

ちはやぶる神の御坂に幣奉り齋ふいのちは母父が爲

(卷二十)

神人部子忍男

知波夜布留 賀美乃美佐賀爾 怒佐麻都里 伊波負伊能知波 意毛知知伐多米

昔年相替りし防人の歌

闇の夜の行く先知らず行く吾を何時來まさむと問ひし兒ら

はも (卷二十)

作者不詳

夜未乃欲能 由久左伎之良受 由久和禮乎 伊都伎麻左牟等 登比之古良波母

族に喩す歌

ひさかたの 天の戸開き 高千穂の 嶽に天降りし 皇祖
の 神の御代より 梶弓を 手握り持たし 眞鹿兒矢を

手挟み添へて 大久米の 丈夫武雄を 先に立て 鞆取り
負せ 山河を 磐根さくみて 履みとほり 國覓しつつ
ちはやぶる 神をことむけ 服従はぬ 人をも和し 掃き
清め 仕へ奉りて 秋津鳥 大和の國の 樞原の 畝傍の
宮に 宮柱 太知り立てて 天の下 知らしめしける 皇
祖の 天の日嗣と つぎて來る 君の御代御代 隠さはぬ
赤き心を 皇方に 極め盡して 仕へ來る 祖の職と
言立てて 授け給へる 子孫の いや繼ぎ繼ぎに 見る人
の 語りつぎてて 聞く人の 鑿にせむを 惜しき 清き
その名ぞ 凡ろかに 心思ひて 虚言も 祖の名斷つな
大伴の 氏と名に負へる 健男の伴 (卷二十) 大伴家持

比左加多能 安麻能刀比良伎 多可知保乃 多氣爾阿毛理之 須賣呂伎能 可未
能御代欲利 波自由美乎 多爾藝利母多之 麻可胡也乎 多波左美蘇倍且 於保
久米能 麻須良多祁乎乎 佐吉爾多且 由伎登利於保世 山河乎 伊波爾左久美
且 希美等保利 久爾麻藝之都都 知波夜夫流 神乎許等牟氣 麻都呂倍奴 比
等乎母夜波之 波吉伎欲米 都可倍麻都里且 安吉豆之萬 夜萬登能久爾乃 可
之婆良能 宇爾備乃宮爾 美也婆之良 布刀之利多且氏 安米能之多 之良志賣
之祁流 須賣呂伎能 安麻能日繼等 都藝且久流 伎美能御代御代 加久佐波奴
安加吉許已呂乎 須賣良弊爾 伎波米都久之且 都加倍久流 於夜能都可佐等
許等太且氏 佐豆氣多麻幣流 宇美乃古能 伊也都藝都較爾 美流比等乃 可多
里都藝且氏 伎久比等能 可我見爾世武乎 安多良之伎 吉用伎會乃名會 於煩
呂加爾 已許呂於母比且 牟奈許等母 於夜乃名多都奈 大伴乃 宇治等名爾於
敵流 麻須良乎能等母

短歌

磯城島の倭の國に明らけき名に負ふ伴の緒こころ勤めよ

四四六六

之奇志麻乃 夜末等能久爾爾 安伎良氣伎 名爾於布等毛能乎 已許呂都刀米與

劔刀いよよ研ぐべし古ゆ清けく負ひて來にしその名ぞ

四四六七

都流藝多知 伊與餘刀具倍之 伊爾之敵由 佐夜氣久於比且 伎爾之會乃名會

詔に應ずる歌

始春の初子の今日の玉箒手に執るからにゆらぐ玉の緒

四四九三

(卷二十) 大伴家持

始春乃 波都爾乃家布能 多麻婆波伎 手爾等流可良爾 由良久多麻能乎

興に依りて各高圓離宮處を思びてよめる歌

高圓の野の上の宮は荒れにけり立たしし君の御代遠ぞけば

四五〇六

多加麻刀能 努乃字倍能美也波 安禮爾家里 多多志志伎美能 美與等保會氣婆

三年春正月一日、因幡國廳にて、饗を國の郡司等に賜へ
る宴の歌

新し^{あらた}き年の始の初春の今日降る雪のいや重^しけ吉^{よごと}事(卷二十)

大伴家持

新年之始乃 波都波流能 家布敷流由伎能 伊夜之家餘其騰

昭和十八年六月二十日印刷
昭和十八年六月二十五日發行(非賣品)

青森縣立青森中學校
發行人 須藤喜一

青森市大字古川字美法六ノ九
印刷人(東青87) 柴田吉五郎

青森市大字古川字美法六ノ九
印刷所 東奥印刷株式會社

發行所 青森縣立青森中學校

439
70

終

